

柴田聡子／SHIBATA SATOKO

シンガー・ソングライター／詩人。北海道札幌市出身。武蔵野美術大学卒業、東京藝術大学大学院修了。

2010年、大学時代の恩師の一言をきっかけに活動を始める。2012年、1stアルバム『しばたさとし島』でデビュー。以来、演劇の祭典「フェスティバル／トーキョー13」では1時間に及ぶ独白のような作品『たのもしむすめ』を発表するなど、歌うことを中心に活動の幅を広げ、現在までに「枚のオリジナル・アルバムを発表。2016年、第一詩集『ちばーく』（試聴室）を上梓。同年、第5回エルスール財団新人賞／現代詩部門Ⅴを受賞。2023年、エッセイ集『されざれのダイアリー』（文藝春秋）、2024年、第二詩集『ダイブ・イン・シアター』（青土社）を上梓。寄稿も多数で、「しずおか連詩の会」への参加など、詩人・文筆家としても注目を集めている。2024年リリースのアルバム『Your Favorite Things』がCDショップ大賞2025／赤く大賞を受賞。2025年、シングル『Passing』をリリース。文を手がけた初の絵本『きょうはやまに』（絵・ハダタカヒト／講談社）の単行本を上梓。

客演や曲提供なども多数で、その創作はとどまるところを知らない。



自らが書いた論文を十数年ぶりに読み返し、「こいつはすごい」と笑いながら語る柴田さん。その声には驚きと照れと、少しの誇らしさと、何か遠くを見るような眼差しが混ざっていました。今回、柴田さんにはご自身の学生時代を振り返っていたきながら、特に修士論文や修了制作と向き合っていた頃のことを中心にお話を伺いました。「同じ時代を生きる表現者」として、柴田さんの言葉に触れてみたいという思いが背景にあります。

メディア映像専攻20期 会田とら／蛭原妃南／原知里

（このインタビューには、「修士論文」という言葉が使われていますが、メディア映像専攻は実作での修了か論文での修了を選択でき、柴田さんも含め多くの修了生は実作での修了を選択しています。そのため、今回の場合、修了の際に提出した文章は「修士論文」ではなく「修了制作作品解説」という位置づけですが、この記事の中では「修士論文」の表記に統一しています。）

——メディア映像専攻での学生生活が現在の支えになっていたり、覚えたりしているエピソードがあればお伺いしたいなと思います。

そうですね。もうあの二年間がないと多分自分は今こんなふうにはやってなかったのかなと思うと、あの二年間を過ごしたこと、それ自体が支えにはなってるんだなっていう感じはありますね。今のこの生き方とかやり方とかを目指して過ごしてたわけではなかったんですけど、結果的に、なくてはならなかったものなのかなと思います、経験として。

具体的に覚えてるエピソードとしては、一生懸命作品を作っている同級生が、夜中研究室で寝てたりとかですかね。いろんな言葉をもらったりかもあったと思うんですけど、それをなんとなく覚えてますね。

——プロレスのリング上で、実況されてましたよね。

そっか、ご存知なんですね。あれは武藤麻衣さんっていう同級生がやって。武藤さんのやっていることは常に印象深かったですね。さっきの研究室で眠っていたのも武藤さんの姿です。あれは大変なことでした。

私も記憶が結構おぼろげになっちゃってるんですけど、確か実況を頼まれた気がするんですよ。その時私がパフォーマンスの作品を主に作っていたりとか、歌を歌っていたりとか、インスピレーションになったのかもしれないんですけど。

(特別演習で) 武藤さんと多分二人で組んだ作品があつて。水をめっちゃぶっかけ合っみたいなの映像作品を作ったんですよ。その時に武藤さんから、柴田さんならもっといけるはずだよ、みたいなことを言われた気がするんですよ。

——映像について、学生・院生から続けてらっしゃることってありますか？

武蔵野美術大学の映像学科に入って学部の一年生の時に、モンタージュの手法とか意味づけを学んだことは、ずっと自分には生きていて。モンタージュを続けているとは言い難いものかもしれないですけど、曲を作ったり詩を書いたり、散文を書いたりする時も、モンタージュの意義とか破壊力の高さとかを感じます。自分の根本の考え方に影響を与えているなと思って使っているなと思いますね。

「完膚無きまでに損なうてやうかいやでもできな」2011年10月6日(土)夜開催 東京藝術大学映像研究科メディア映像専攻「Open Studio 2011」オープニングパーティーにて武藤麻衣が企画・監修した。会場は、映画専攻も使っていた新港校舎スタジオ（現在は存在しない）であった。（<https://imgeldata.jp/opensstudio/2011/event/index.html>、2025年5月21日最終閲覧）

——MEDIA PRACTICEの歌を歌われていたと思いますが、覚えてらっしゃいますか？

これは覚えています、さすがに。このMEDIA PRACTICEっていう展示を、どうやったらくさんの人に見てもらえるかっていう広報のアイデアとして多分始まったんですよ。とにかく修了制作って、なかなか人が見に来てくれないよなあとか、あとは見に来てくれてもアートに関わる人たちとか、大学に関わる人たちとか結構近い範囲の人が来場してくれることが多いよねっていう話だったと思うんです。どうしたらたくさんの人に届くだろうかっていうことを考えて……。それは歌詞にも反映されてると思うんだけど、見たいんだよ、見たいんでしょみたいな。たまたま音楽に親しみのある学生が多かったので、テーマソングを作ろうっていうことになったんだと、私は記憶しているんですけど。

——異例の集客だった？

そう、ウェブサイト担当の学生の子が言っていました。ウェブ滞在時間がありえないほど長いみたいなことを言っていて、あ、そうなんだみたいな……。そういう意味では結構良かったのかもしれないですね。

——柴田さんの代は、アートの世界として区切られてない印象があって、いい意味で異質を感じがします。

私も一員として、（個人的には）それは本当に嬉しいかもなっと思っていますね。

——インタビュー前に緊張してて、私が勝手に（この曲を）流して、リラックス効果じゃないですけど…。

確かにゆるくていい歌ですよ。あれは未だに言われますよ。あれで好きになりましたとか言われるんですけど、ちょっとそんなことあるのかなみたいな。私が作曲したわけでもないし、みんなで作ってたんで、不思議ですよ。歌の持つ波及力と
いうか。

——修士論文には「映像とは記録ということが大事なのである」など書かれていたと思うんですけど、改めて映像というものについて、今どういう風に考えているのかをお聞きできればと思っています。

自分も久々に読んだり見たりして、やばいなと。大変な状態で卒業してしまったんだなっていう感じで、かなり苦し紛れだったと思いますね。

修士を修了した時点では、私は映像っていうことそのものについて分からなくても、自分の考えが未熟でも、突き進んでいく答えみたいなのってあんまりなくて、衝動というか。だから今音楽の方へ行ったのだと思うんですけど。当時は多分それとしか言いようがなかった。発想の先に無いものに感じていました。あの当時は。実際そうだとも思っただし。

——今は見え方が違うということですか？

今も分からないんですよ。今もミュージックビデオを作るとか、あと映像を撮るっていうのは、自分の活動においては、プロモーションのやり方としてそういうことがあるっていう感じなんです。だからその形を使って面白いものを作っていくっていうことはあると思うんですけど、ミュージックビデオに関しては、ほぼ常にモチーフ側に居なきゃいけないんですよ。それは、映像を撮るとか映像を考えるっていうところと役割が違うなっていると思います。大学院時代には、起こり得ていなかったことが起こるようにはなったかな。

――修了制作や修士論文を書くのは大変でしたか？

大変でなくちゃみたいなことを思っていましたね。私が経験してきた、美術大学の病（やまい）みたいなものかもしれないですけど、作ることは大変であって、卒制は大変であるみたいな。そういうことが感じられないと卒業制作だったり修了制作じゃないんじゃないかっていう浅はかな気持ちがあったので。自分に暗示をかけていたような気がしますね。これは大変なことだとか、文章を書くのは大変だなとか、作品を作ると大変だなって。本当に大変であることは、当時マジで分かっていたなと思います。大変コスプレをしてたっていうか。もっと大変なことはあるよ。でも比べられないですよ、未来と。当時の自分のやれることとか考え方の限界ではあったと思いますけど、もうちょっと考えておけばよかったなと思いますね。

――修士論文の中で女性性について考えなきゃいけないみたいなことを書いてらっしゃったんですけど、今、改めてどうですか？

修士論文を改めて読み直して私はこんなに女性性について書こうとしていたんだっていうのにはまずびっくりしました。自分が本格的にフェミニズムの思想に触れたり、みんなどういうことを考えているのかに触れたのは、大学院を出てからだったんですけど。出で以降、今に至るまで、フェミニズムって本当にうまく今機能してるんだろとかみたいな疑問とか、本当に機能するためのやり方みたいなことを考えていたなって思ってたんですよ。で、考えていて答えが出なくて。なんだか自分の考えている女性性の扱われ方とかは、世間で目立つフェミニズムとはちょっと方向性が違うなっていう風に思うようになっていった気がしていて、それで口をつぐんでた感じがあるんで。あんまり結論が出なくて喋り出せないっていうか。だからあんなに書いてたんだと思って、本当にびっくりしましたけど、考えはそんな変わってないんだっていうのも思いました。自分自身への女性嫌悪から始まってそれが周りの女性の嫌悪にもつながっていくようなことって原点だったなと思うんで、びっくりしました。私は多分外から見ると女性性を問題にして活動しているっていう風には見えないだろうし、そういうモチーフもはつきり使ったりしないんで、でもいつからそんな風にはつきり言わないでやるようになったのかっていうの、不思議ですね。

——「結局シリアスに終わった、劇的にコミカルにするほどコミカルにならないものはないと痛感をした」っていう記載もありましたが、今もシリアスにならないように気をつけていますか？

修士論文を書いた時、私の中に「おもしろい」っていうことが、笑えるとかそういうことが、価値の最上級にあったんですね。私だけじゃなくて、私の世代そのものに、そういうものの残り香があったと思うんですね。シリアスっていうのは、しらけることなんじゃないかなって思ってたんですよ。しーん、笑えないみたいな。それを自然と恐怖に感じて、避けてたっていうところもあったと思うんですよ。

その時点とは今はちょっと違って、笑いを取りに行く必要なんてまずない。笑えないことは笑えないままやればいいんだけど、自分の性質として笑えないことを笑えないまま人に伝えるって結構難しいところがあつて。辛いことがあればあるほど聞いてもらう人には面白く聞いてもらわないと、そうじゃないとちょっと話せないな、みたいなことが自分にはあるなと思って。だからちょっと軽くしたいなとか。自分が耐えきれないからそうしてんだっていうところが今は大きいなと思います。シリアスですつと行くよりはどこかで軽さがないと自分は耐えきれないんだなと。

あとは歌の表現としては、音楽はメロディーと、私が書けるものだと言語があつて、要素が大きく分かれると思うんですけど、そこで落差があるっていうことの印象付けのテクニクは、作品作る上で何でもそうだと思うんですけど、利用してると思います。やっぱり共感してもらつていうことと、伝えることとて、ちょっと違うような気がするんです。私は昔から共感する・されるっていうことについて、警戒心が強いので。例えばシリアスな内容なんだけでも、軽い見た目をしてるってだけで、そういうものを遠ざけてるなと思って思います。

——作品は見てもらわなきゃ意味がないとも書かれてたんですけども、それは共感されることはまた違う？

違うと思います。なんていうか、例えばこっちが見てもらおうっていう努力をするとき、共感してもらうことを目的に、そこに訴えかけるみたいなのはテクニクの一個としても確立してると思うんですけど。それは使わないって感じですかね。で、見る方も、見るっていうことと共感するっていうことは、そんなに直結はしてないんじゃないかなと思うので、そういう感じで、共感というテクニクを使っていかないってことかな。結構使えると思うんですけど、やろうと思えば。ただそれを本当に自分がやりたい場合以外はやらないっていうことですかね。

——修士論文はいつぶりに見ましたか？

多分卒業して以来初めてぐらいだと思います。うーん、初めてとまではいかないか。ただ記憶があるところがなかったです。一応(全部)読みました。すごく苦痛でしたね。

——自分で書いたみたいない記憶はありますか？

ありますね。こういう人間だったわ自分っていうのを、すごく受け入れました。

——読み返して驚いたことはありますか。

いやもうなんか、全編驚きって感じだったんですけど、本当に。驚きというか辟易って感じだったんですけど、うーん……まあ、「文体」ですかね、やっぱり一番気になったのは。内容は、案外本当に自分の原点にある考え方だなと思ってそんなに違和感を覚えなかったんですけど、文体は、やっぱり今これでは書けないなって思いました。論文という形を取っていたからかもしれないですけど、さっきも話したようにこんなに断言しなきゃいけない場所ではもう書けないな自分はずって思います。本当に、今ふわとした文章しか書けなくなってるんですね。「だと思えます」とか、「そう感じます」みたいな。こんなことをお尻につけないとどうしてもいられなくなってるのが悩みでもあるんですけど。まず文体が本当に……。こいつはすごい、よくこんなこと言い切るなみたいな感じがあったのと……。でも内容については本当に稚拙ですけど、あんまり考えてることは変わらないか。ある意味「ちよつといいな」とも思いました。周りを気にせず、書き切っていくみたいな感じを。本当に良い意味でも悪い意味でも見られるみたいなことに、今すごく晒されてるなって思うからなんかそれで歯切れが悪くなってる部分はあると思うので、誰にも見られてないゆえの強さみたいなことは、ほんとにちよつと、勇気もらいました。

——今いらつしやる場所から、メディア映像専攻や、大学（院）という場所がどう見えてるのかをお聞きしたいです。

なんていうか、全然違う世界なのかなとも思いますね。例えば私が主に身を置いている商業音楽の世界は、やっぱり人気がなければある側面では厳しい世界だったりもするし。ただだからといって（人気やお金に直結しない表現が）消えていいもんじゃないと思うんですよね。そういうことにも目を向けられる人がいっぱいいるところが大学のいいところだなとも思うし。そういうことをしてくれてるからいつか芽吹くものがあるなって本当に思うから、それぞれの世界で頑張りつつ、たまに分かり合えたらいいなと思いますね。

世界が今、結構行き詰まったりして大変なことがめちゃくちゃ起こっていることに、対処療法みたいになんていかなきゃいけない場面でもあるよなって思うんですよね。その時にお互いの立場から考えていけるといいな、どっちが悪い良いたかじゃなくてと思います。

——音楽業界の中心にいて、柴田さんの美術大学のバックグラウンドが関係してるなって思ふことはありますか？

いや全然関係なさそうです（笑）プロフィールに書いてあってムサビ（武蔵野美術大学）出身なんですって言われることないですね。なんか藝大（東京藝術大学）出身なんですねって言われることはたまにあるんですけど、メディア映像専攻ってちょっと上野の藝大の組織とは違う感じが、別の組織って感じですよ。藝大の一つではあるんだけど、なんかこうそのプロフィールだけ読む人が必要としていることは言っちゃいけないなっていつも思いますね。

——たくさんインタビューとか対談をされていらつしやる柴田さんがインタビューに対してどう思われているかというのを聞きできたらなと思います。

本当に一度たりともうまくいったことがないなと思います。毎回本当に難しく人と話すっていうことが第一にあるじゃないですか。大体が初めて出会う人と話ばりそこで素直に話をできるとか慌てずに話せるってなかなかできないよなっずっと思ってるんですけど、かといって話したことがある人と話すとしてもすごい難しいんですよね。言葉にするっていうこと自体が本当に難しいです。頭で考えていること、自分が考えていることを言葉にした時点でひとつ翻訳が入って、人に話すことでもうひとつ翻訳が入って、その人が文章にするっていうところでもうひとつ翻訳が入って、もう伝言ゲームみたいになっちゃうんですよね。そこでめちゃくちゃうまくいくということはなかなかないなっと思うので、だいたいうまくいったら「やった！」っと思うように最近はなってきてます。自分で言葉にする努力もしながら、だから本当に毎回どうしようっと思ってます。今日もですけど(笑)

——だんだん上手くなってきましたか？

どれを上手い状態っていうのか分かんないんですけど、こういうことをよく聞かれるなっっていうのはだんだんわかってはくるんですよ。それへの傾向と対策みたいな感じでやっていくことはできるんですよ。こう言えばなんか自分は納得するなとか、見栄えがいいなとか、まとまってるなみたいなのはあるんですけど。それがいいのかっていうのは本当にいつもわからなくて、本当？とも思うんですよ。たまたまうまく言えたなっっていう感じがするだけで、本当にそれが一番良い言葉なのかっていうのは疑問だなっと思うから、最近はなんか飛び込んでく感じで喋ってますね。あまりまとまりをつけずというか。面白く思われたいみたいなことはもうやめようっというか、インタビューもある意味その人に対するパフォーマンスみたいなところがあるから、どれだけかますかみたいな、そういうのはちょっとやめていこうっと思います。



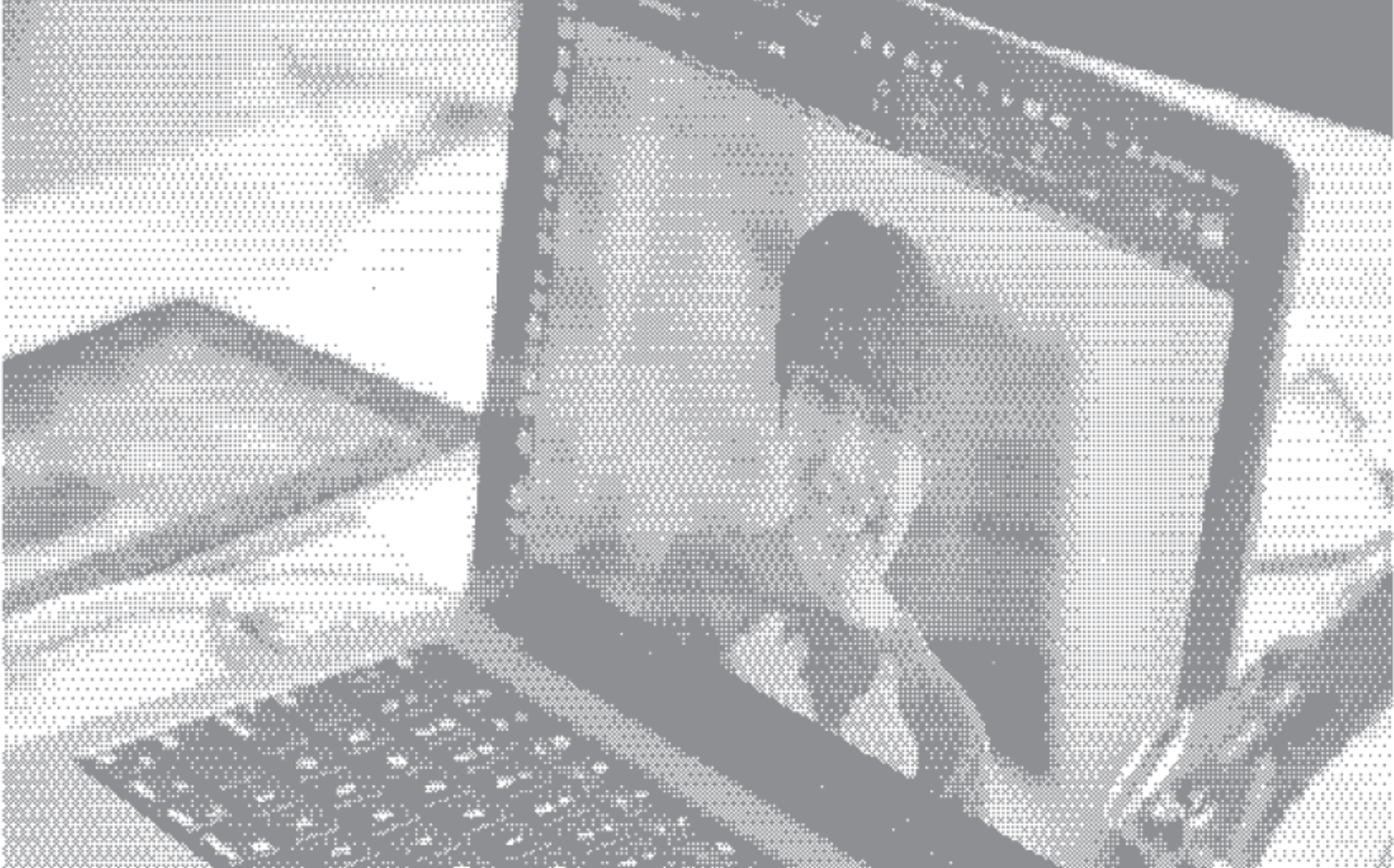






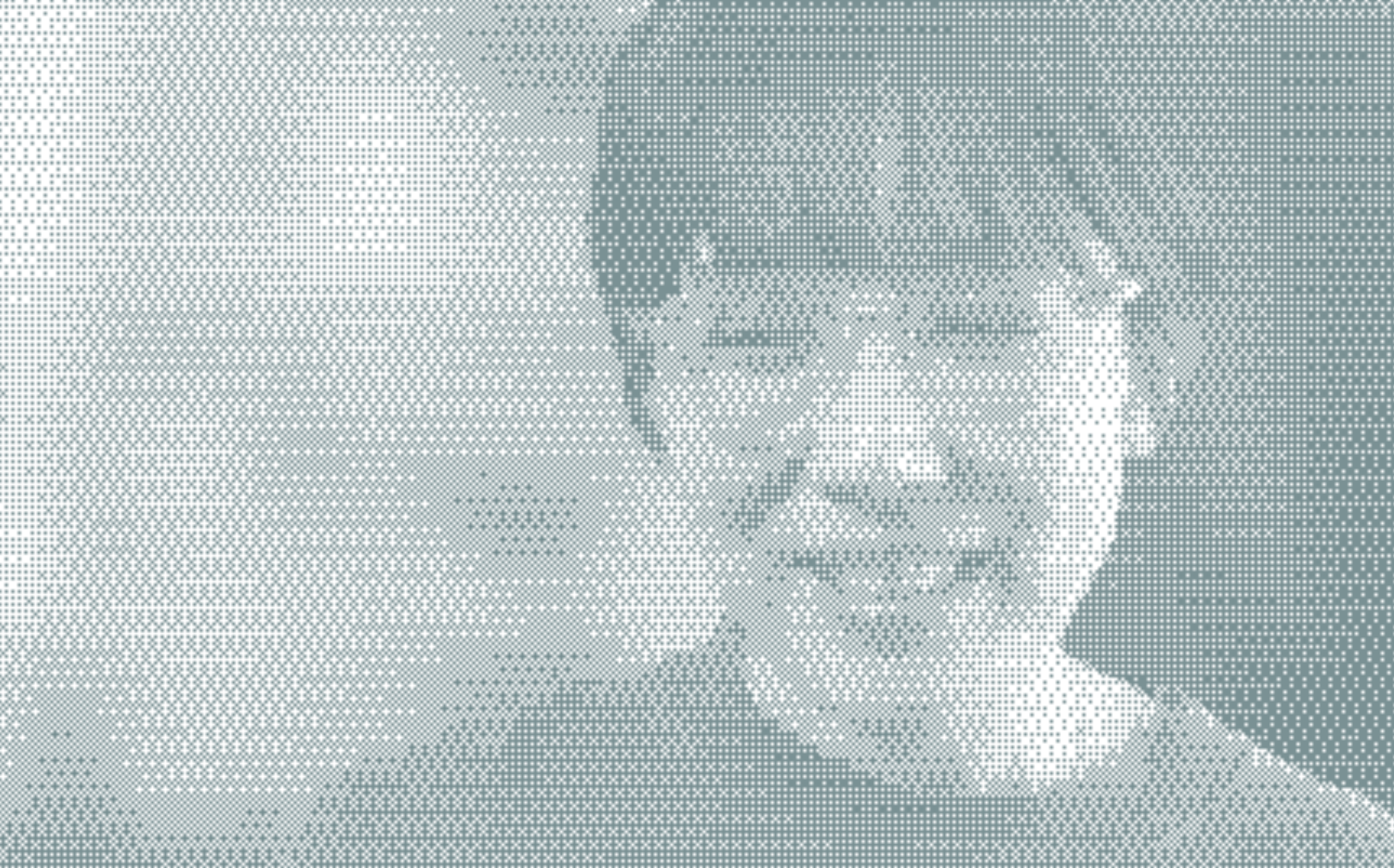


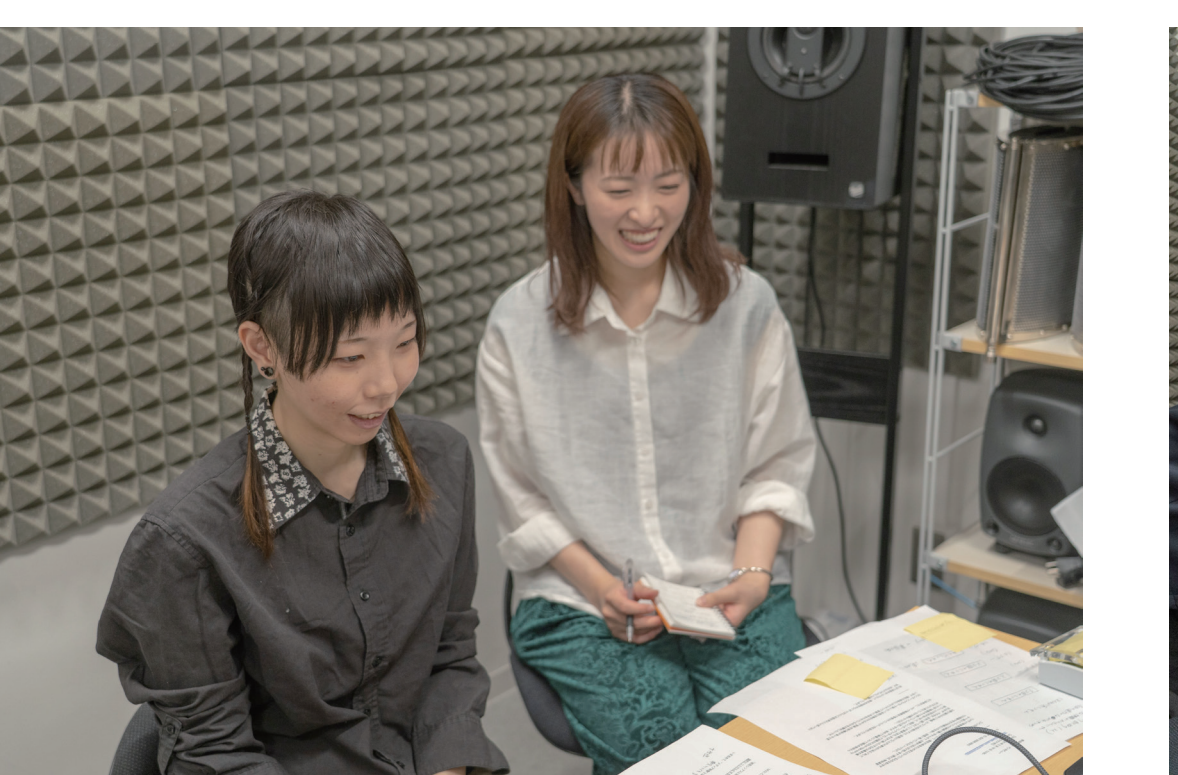
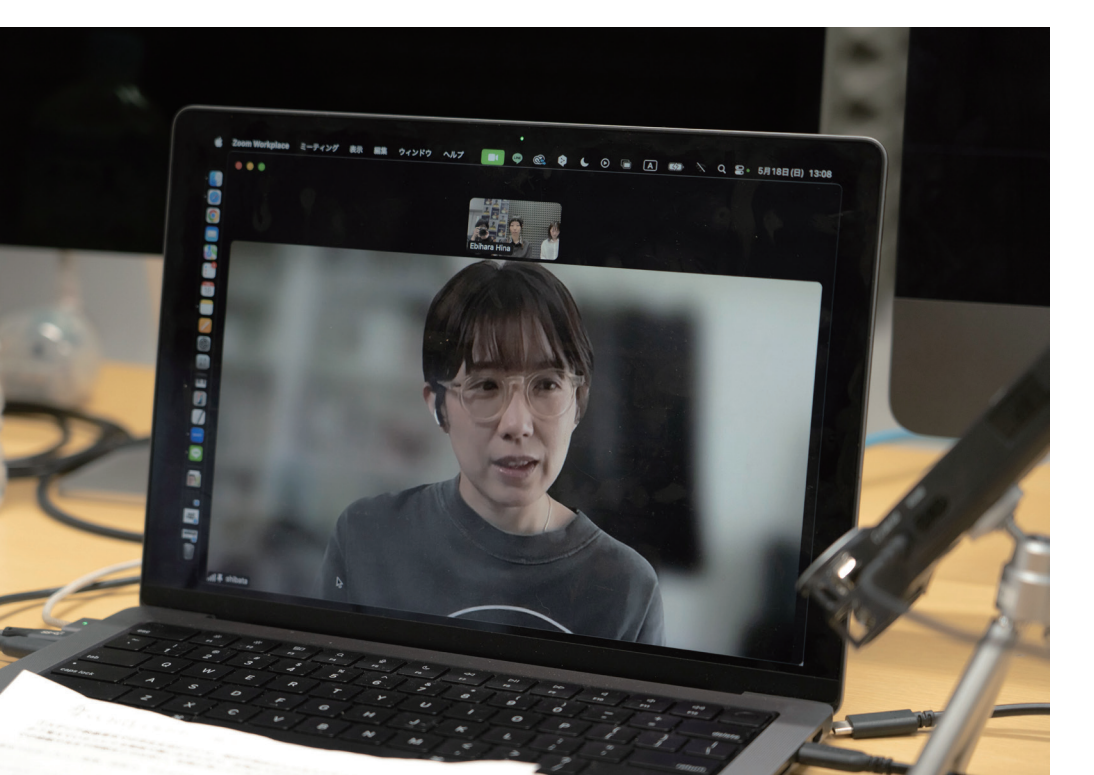












「あなたとわたしのメディアプラクティス」
東京藝術大学メディア映像専攻、2012、1 分 52 秒時点のキャプチャー。
URL: <https://www.youtube.com/watch?v=Ag-l3a0pd10>

武藤麻衣による「Open Studio 2011」オープニングパーティの様子を写した動画。
nao yoshigai, 2012、2 分 32 秒時点のキャプチャー。
URL: <https://www.youtube.com/watch?v=2EKuaj0Uopw>